

ツタヤ図書館の作られ方～和歌山市の場合～ 自治体の主体性はどこへ行った

大阪支部 脇谷邦子

2020年6月5日に移転新築した新和歌山市民図書館がグランドオープンした。旧和歌山市民図書館は1981年開館し、蔵書数約45万冊の市直営の独立館で、和歌山市駅から500mほどの地にあった。新しく開館した図書館は、CCC(カルチャーコンビニエンス・クラブ)が指定管理者として運営に携わっている。全国では武雄・海老名・多賀城・高梁・周南に次ぐ6番目のツタヤ図書館の開館である。南海電鉄和歌山市駅に直結し、商業棟やホテルも併設されている。2014年に高島屋が撤退し、久しく賑わいから遠ざかっていた地区に人々が集まる空間が登場し、コロナ禍の中でも結構な賑わいを見せていた。

図書館としては何かと問題点が多いツタヤ図書館であるが、和歌山の場合はどうであろうか。その点については次号で稲垣房子氏の報告が予定されている。ここでは開館に至る経緯について述べたい。

和歌山市駅前の高島屋の撤退が発端??

和歌山市駅前の高島屋デパートが撤退した2014年に「和歌山市駅周辺活性化調整会議」が始まった。市都市計画部・県都市住宅局・南海電鉄経営企画部の3者で市駅活性化に向けて組織をもって協議を重ねて行くことで合意し、これまでに数十回の会議を重ねている。2回目の会議からRIAという建設コンサルタント・設計業者が加わっている。RIAは代官山T-Siteのプロジェクトなど、「10年以上にわたってCCCと良い関係を築いてきた」(RIAのHPより)企業で、武雄市や高梁市図書館等の設計にも関わっている。国の補助金等の関係もあり、公益施設として、新図書館移転建設が浮上して以降は生涯学習部が調整会議に加わり、市民図書館も加わるようになった。そしてすぐにRIAが手掛けた武雄市図書館の見学が行われている。情報開示請求による調整会議の会議録はほとんど墨塗りで、全容はわからないものの、2015年から2018年にかけて、敷地計画・資金計画・図書館の維持管理業務・設計案(RIA作成)についても、この会議で話し合われていることが窺える。

南海電鉄が建設した図書館を和歌山市が買い取り、図書館基本設計はRIAが作成し、新しい図書館の指定管理者はCCCとなった結果をみれば、もともと結論有りき・民間主導で作られた図書館計画であったことが推察される。『和歌山市民図書館要覧』にも新館建設についてほとんど触れられていない。図書館計画が市や図書館の側から出たのではなく、民間主導で進められてきた証と言えるのではないだろうか。

図書館建設計画はすべて民間丸投げで

さて、図書館建設が決まって、2015年度、図書館は「新図書館基本構想」を策定し、発表する。基本理念として、「図書館がつなぐ—『本と人』『人と人』『人とまち』—」とし、基本目標として、①すべての市民が、利用しやすい図書館、②情報拠点として、資料の充実、③市民の学びと、課題解決の支援、④郷土の歴史と文化の継承、⑤人と人とのつながりを育む図書館、⑥まちの拠点となる図書館を上げる。



《2F
正面入口》

続いて、2016年に「新図書館基本計画」策定業務をアトリエグリッドという地元建築士事務所に委託する。キックオフ講演会「みんなでつくろう未来の図書館」（講師：渡部幹雄和歌山大学附属図書館長）と4回のワークショップを重ねて市民の声を聞く。基本構想の基本理念を踏まえて、新図書館のサービス方針、計画蔵書冊数及び資料収集方針、新図書館施設計画方針、新図書館管理運営方針等を定めている。サービス方針については、地域資料の積極的な収集と提供、地域資料の活用、市民活動・市民交流を促進、閲覧・貸出・レファレンス・ICTサービスの充実、分館を10館に増やす、学校や市民ボランティアとの連携の拡充等、しごく真つ当な方針があげられているものの、賑わいと交流の拠点、開館日・開館時間の拡大など気になる点も見られる。

ちなみに、委託したとは言え、図書館から費用が出ている以上これらの講演会・ワークショップは、れっきとした図書館のイベントであるはずなのに、前記『和歌山市民図書館要覧』に全く記載がない！ということは、新図書館計画に図書館が関わっていないか、関わらせてもらえていないのではなかろうか。基本構想、基本計画作成は民間業者に丸投げで、現場の図書館員が関与した形跡はほとんどない。

2016年から2017年度の図書館協議会において新図書館の指定管理運営が討議され、渡部幹雄協議会会長が、問題点を指摘し反対の意を表明し孤軍奮闘されていたが、他の協議会委員は賛成・反対の意見表明もなく、ほとんど無関心で、図書館側も渡部氏に反論するでもなく、全くの一人相撲に終わっていて無残としか言いようがない。

もしかして委託？ 指定管理？

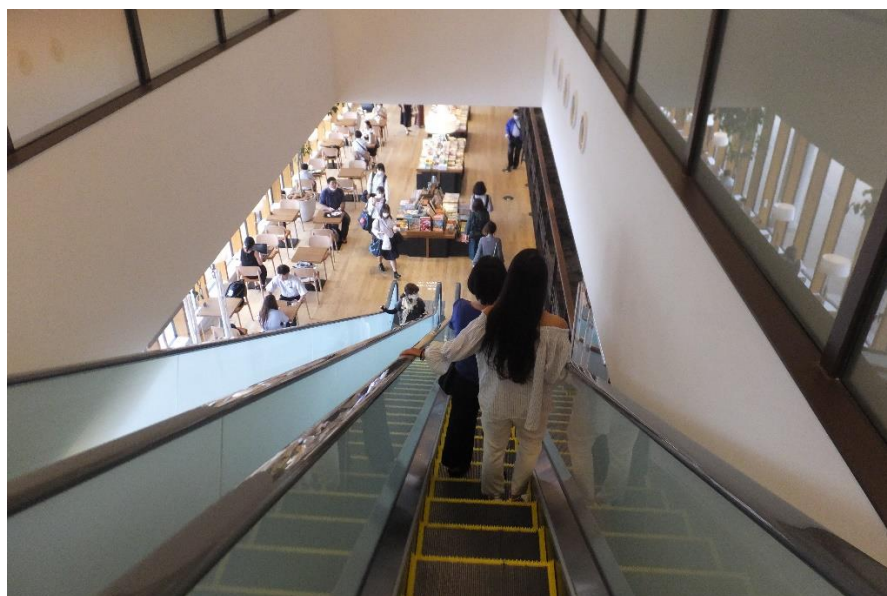
「新図書館基本計画」を見て、不安になった市民が動き出す。市に管理運営について尋ねても、「決まっていない、検討中です」としか当局は答えない。2017年には市民対象に新図書館の説明会が開かれ、事例として高梁市のツタヤ図書館が紹介され、5月31日の説明会で運営形態についての市民からの質問に対しても「検討中」としか、答えなかったが、6月議会において、あっさり新図書館の指定管理が決まってしまった。新図書館の指定管理が決まるや否や、市当局

は指定管理業者の募集を始め、11月24日には業者選定のプレゼンが公開で行われた。応募したのは TRC と CCC。図書館業務に関しては、TRC が具体的で説得力があったと思う。CCC は図書館業務に関して具体性に乏しく、まちの賑わいづくりを強調していた。図書館運営のプレゼンなので、参加した市民の多くは当然 TRC と思っていたが、決まったのは CCC だった。

ここで改めて提案募集にあたっての募集要件を読み直してみると、「新しい図書館の目指すもの」として、真っ先に①「まちの賑わいとなる図書館」、続いて②「すべての市民が利用しやすく、居心地よく滞在できる図書館—開館時間・開館日の拡大、来館者目標を50万人以上—」となっていて、⑤になって、「市民の学びと問題解決を行う」と来る。⑥は「まち歩き拠点—まちのコンシェルジュ機能、観光案内、レンタサイクル—」とくれば、これはもう初めから CCC のための募集要項としか思えない。基本構想・基本計画では一応図書館機能が尊重されていたが、ここでは図書館の本来機能はどうでもよく、まず、賑わいなのである。両社の落札率が99%という高率で談合との噂もあり、また後の情報開示によれば、一人の委員(市の関係者か?)が極端に TRC に低い点をつけており、公開プレゼンは出来レースだったのだと思わざるを得ない。

図書館建設は民間主導で進められ、図書館はただ市民の疑問・質問・批判の矢面にたたされてきた感がある。

2019年に入ると新図書館の開館準備が始まった。この移転準備のために約1億1千万円で CCC との間に委託契約が結ばれている。新図書館の開館は遅れた。遅れた理由は明らかにされていない。開館が遅れたため、ツタヤが図書館の指定管理業務に携わったのは2019年12月からである。2019年度の指定管理料は約7千7百万円となっている。2020年度の指定管理料は年間3億3千万円、2024年度までの契約である。



《1F-2F
エスカレーター》

公共事業に民間が絡むと情報が…

いわゆるツタヤ図書館問題、和歌山市と CCC の疑惑については、フリージャーナリストの日向咲嗣氏が追求し、ブログやネット上の「Business Journal」等で発信し続けている。真相を知るべく、日向氏や和歌山市民が情報開示請求しても、企業秘密の名のもとに多くの事実が公表されず、市民が知ることにはなっていない。

指定管理業者募集の際の TRC と CCC の提案内容の情報開示請求をしたが、未だに開示されていない。不服申し立て後の返答も未だにない。そもそも公開で行われたプレゼンで、内容は多くの人が知るところであり、秘密ではないはずであり、採用された企業の案は、事業開始後に形となって表れるはずのものであるので、企業秘密にはあたらないと考える。自治体間で対応のバラつきがあり、不採用の提案も含めて開示する自治体もあるが、採用された提案については開示する自治体が大半である。

2018年3月30日付けで、「和歌山市民図書館の指定管理に係る基本協定書」が締結されている。図書館業務に関する仕様書の開示を求め続けたが、「不存在」と回答され続けてきた。開館準備業務委託契約が4月に結ばれた2019年になって、「作成中」との回答に変わり、2019年12月の「年度協定書」とともに、やっと仕様書(2019年12月付け)が開示されたのは2020年2月半ばである。仕様書作成まで丸投げした(したのか?)とは思われないが、CCCと相談の上での作成だったのであろう。ここまでくれば、自治体自身が企業秘密の名のもとに情報隠蔽に加担していると受け取られても仕方がない。自治体としての主体性はどこにいったのか。

自治体の直営ならば、予算・決算、会議録の類はすべて明らかにされる。しかし、会議録はもとより、広く市民に供されるために使われる公金であるのにもかかわらず、民間企業が絡むと公表されなくなる。このことを以てしても行政サービス、特に福祉や教育関係の公共サービスは、本来自治体が直接市民に対して責任を負って提供すべきであり、民間に任せるべきではない。金(賑わい・経済)に目が眩んで、魂(図書館の本質)を売り渡してはならない。住民に奉仕する自治体の本分に立ち戻れ。